断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑥2

高橋 基

―旭川のカムイコタン⑲―

前回に続き、明治二十三年三月に、このカムイコタンを調査した永田方正が、初めて採録した「シケウシュナイ（shike-ush-nai 荷ひ川）―此の川より荷物を陸揚げして荷ひ行くを以て名く。樺戸監獄署神居古丹派出所ある所。」を検証する（前回も記したように、ウシュは永田方正の独自表記なので、以下、永田方正以外の表記では、シケウシナイと表記する）。

永田方正が明記しているように、この川は、樺戸監獄署神居古丹派出所のある処の川であるという。したがって、樺戸監獄署神居古丹派出所の位置が特定できれば、そこにある川がシケウシナイである。ところが、現時点で、樺戸監獄署神居古丹派出所の位置を特定できる公的な史資料が発見されていない。そこで、前回も掲載した明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』を見ると、永田の表記通りのシケウシュナイがある。ただ、この地図は、前回も指摘したように、「レーコロプイラ（re-kor-puira 名・を持つ・激流→有名な激流の意味）」の位置が誤って掲載されていたので、慎重に検討する必要がある。

以上の諸点を踏まえた上で、アイヌ語地名研究家の山田秀三は、『深川のアイヌ地名を尋ねて』（昭和五十二年刊）で、理解しやすいように、次のように解説している。**掲載図の①②**を参照してお読みいただきたい。

「そのシケウシナイ迄行くのには、神居古潭の激流を相当溯らなければならない。安定の悪い丸木舟では大変なことだと思って眺めた。だが『石狩日誌』で見ると、シュマチセ（suma-cise 岩・家）は、「シキウシバ（シケウシー荷物背負場）」の対岸だという。シュマチセの位置の方はわかっているのだから、『石狩日誌』で書かれたシキウシバは、今、吊橋（註・神居大橋）のある附近のことだったと理解してよいらしい。シケウシと呼ばれた一帯の土地の端にある川なのでシケウシナイと云われたのではなかろうか。」

そこで、前回、写真でお見せしたように、昭和六十一年七月末に、四人乗りゴムボートで、地図のシケウシュナイまで溯った。季節・水量により左右されるが、この時は意外と簡単に溯ることができた。踏査の結果、シケウシュナイまで丸木舟で溯る事は可能と判断することができた。

山田秀三は、「シキウシバ（シケウシー荷物背負場）は、吊橋（神居大橋）のある附近で、シケウシと呼ばれた一帯の土地の端にある川なのでシケウシナイと云われたのではなかろうか。」と、永田方正の記録を肯定的に述べている。

確かに、この部分だけを見るとこの通りに理解できる。しかし、永田方正の原著、『北海道蝦夷語地名解』を見ると、このシケウシュナイと、その下流にある**掲載図②**「ポロレプシペ（poro-rep-us-pe 大きい・沖・に）」について・もの＝岩）との間に、「イヤプテウシ（i-yapte-ushi 揚場）―荷物を陸揚げする処なり」を記録している。すなわち、ポロレプシペより上流に、イヤプテウシ＝（山田秀三の言う）シケウシがあり、そこにある川なので、シケウシュナイという名称があると記述しているのである。ここは、知里真志保の地名解も混乱しているので、次号で解明していきたい。

（アイヌ語地名研究会幹事）

※毎月第1週号に掲載します

①明治三十年製版『北海道仮製五万分一図』

②現・神居古潭（二万五千分一図）